



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics : Focusing on the Bikin Dialect of Udihe [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	白, 尚燁
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12069号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61555
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Baek_Sangyub_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 白 尚 燐

主査 特任教授 津曲 敏郎
審査委員 副査 教授 佐藤 知己
副査 准教授 高瀬 克範

学位論文題名

**Tungusic from the Perspective of Areal Linguistics:
Focusing on the Bikin Dialect of Udihe**

（地域言語学的観点から見たツングース諸語—ウデヘ語のビキン方言を中心に）

ツングース諸語は、東シベリアからロシア極東、および中国の東北部と新疆ウイグル自治区にかけて分布する少数民族言語であり、12ほどの同系言語からなる。本論文では、これらツングース諸語をその分布域から北、東、南の3つのグループに分け、その地域的分布が構造上の統語的相違と相関していることを示す。その理由として、周辺言語との接触に起因する可能性を提示する。申請者自身がフィールドワークによってデータを得た、ロシア沿海地方に位置するウデヘ語ビキン方言を中心にすえながら、他のツングース諸語についても広範囲の文献からデータを利用している。これまでツングース諸語全体を通して比較されることが少なかった文法構造の中から4つの統語現象に着目し、それぞれに独自の類型論的パラメータをたてて地域的相違を論じている。

本論文は、こうした観点のもと、先行研究の分析やデータを丹念に参照しつつ、自身のフィールドワークによる一次資料をフルに活用している。各言語における当該文法現象の共時的記述をもとにしなが、言語間・地域間の比較や他言語からの影響による通時的変化や言語動態をも視野に置いて、ツングース諸語内部の多様性と地域特性の解明を試みるものである。とくにツングース諸語を地域的分布によって、3つのグループに分けて考えることで、上記のような統語的相違とのあいだに明瞭な相関性が指摘できること、さらにその事実がそれぞれ異なる周辺言語による影響、ないし同一周辺言語による影響度合いの相対性によって説明できる可能性を主張した。

本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

1. ツングース諸語を地理的分布によって3つのグループに分け、グループ間の示す類型的差異が周辺言語からの影響の度合いによって説明できる可能性を示した点。
2. これまでツングース諸語全体を通しての比較研究が少なかった統語的特性を取り上げ、各言語の具体的なデータにもとづき、最新の類型論の成果も踏まえながら、その多様性を類型化した点。
3. 先行研究のデータや分析に基づいて言語事実の共時的分析と比較を行い、言語接触や言語動態を視野に、歴史の解明をめざす研究の方向性を示した点。
4. 話者僅少のウデヘ語ビキン方言について現地調査により一次資料を収集し、方言差や世代差を周辺言語からの影響も考慮しながら提示した点。

申請者は本論文を構成する研究テーマについて一貫した視点から、内外の査読付き専門誌や国際学会でも積極的に発表を重ね、着実に発展させてきた。本論文が英語で書かれているのも、その延長線上にあると同時に、国際的に寄与する研究でありたいという意欲の現われである。研究を進める過程で、広範囲に渡る先行文献からデータを集積するとともに、みずからの実地調査によっても一次資料を収集して活用している。いっぽうで、最新の言語類型論や地域言語学に関する理論的側面の吸収にも熱心であり、その成果を本論文にも的確に反映させている。ウデヘ語という、類型的にもユニークな言語を中心にすえながら、各言語の先行研究を十分に踏まえたうえで、自身の独自の目標を見出し、将来の方向性を見据える姿勢は高く評価できる。

いっぽう審査の過程において、いくつかの問題点も指摘された。とりわけ、言語構造の変容が周辺言語の影響によることをどう証拠立てるのか、また異言語の接触すなわち人々の交流の実態が歴史的事実によってどう裏付けられるのか、といった点の考察が本論文では不十分なままである。しかしながら、前者については、原理的に状況証拠を積み上げるしかないのが実態であり、むしろ本論文はこの問題に重要な事例を提供したと言える。後者の問題、すなわち歴史的事実との照合については、もはや言語学の枠を超えるテーマであり、むしろこれも本論文の指摘が契機となって、学際的に解明が進められることが期待される。いずれにしても、こうした点について申請者自身が課題として十分に認識しており、むしろ今後の研究の展開がおおいに期待できる部分であると判断される。多言語に渡る広範囲な文献資料から丹念にデータを収集し、ミクロな分析を加えたうえで、マクロな仮説を展開することは、申請者の研究能力の高さを示すものであり、こうした不足を補って余りあると言えよう。

全体として本論文は、独自の視点と手堅い分析手法で貫かれており、理論と記述の両面できわめて高い水準にあると判断される。当委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるものである。